

# ベートーヴェン 交響曲第9番「合唱」 第4楽章 歌詞対訳

<冒頭Bassレチタティーヴォ> ベートーヴェン自身の詞

O Freunde, nicht diese Töne !  
友よ ~ない この 音(複数) おお、友よ、この調べではなく

sondern lasst uns angenehmere anstimmen,  
そうではなく ~しよう より心地よい[比較級] 歌い始めよう もっと心地よく歌い始めよう。  
※分離動詞 an\_stimmen

und freudenvollere.  
より喜びに満ちた[比較級] そしてもっと喜びに満ちて。

以下、フリードリヒ・フォン・シラー「An die Freude (歓喜に寄せて、1785年)」から

シラーの原詩は、8行+4行の節が9節ある。各節後ろの4行はChorと記されている。  
ここでは節の前半の8行を4行×2と考えて、各節を4行ずつA,B,Cとし、**1A・2B**などと付番しておく。

**1A** 最初はソロだけ。次は**1A1B**で全合唱。その後は**1A**だけで二重フーガの第2主題、ラストの急速合唱と何度も登場。

Freude, schöner Götterfunken,  
喜びよ 美しい 神々の火花よ 喜びよ、美しい神々の火花よ

Tochter aus Elysium,  
娘よ ~からの エリジウム 楽園エリジウムの娘よ

Wir betreten feuertrunken,  
我々は 踏み入る 炎に酔って 私たちは踏み入る、炎に酔いしれて  
※ trinken(飲む,→完全 getrunken)→ trunken(酔って)

Himmlische, dein Heiligtum!  
天なる あなたの 聖所 天なる(喜び)、あなたの聖所へと  
※形容詞 himmlischの女性名詞形なので Freudeが省略か

**1B** 最初の合唱。次は**1A1B**で全合唱。その後はソリスト四重唱が**1A1B**を歌う際、合唱は**1B**を歌う。

Deine Zauber binden wieder,  
あなたの 魔力は[男複] 結びつける 再び あなたの魔力は再び結びつける、

Was die Mode streng geteilt,  
~のものを 世間が[女単] 厳しく 分け隔てた[充分、現在完了 hat 省略] 世間の慣習が厳しく分け隔てたものを。  
※ teilen 分ける

Alle Menschen werden Brüder,  
全ての 人々は ~になる 兄弟 全てのひとは兄弟になる、

Wo dein sanfter Flügel weilt.  
~の所で あなたの 柔らかな 翼が[男単] 留まる あなたの柔らかな翼が憩うところで。  
※ weilen[雅語]留まる・滞在する

※ Elysiumは、ギリシャ神話に出てくる永遠の楽土「エリュシオン Elysion」。

古代ギリシャの詩人ホメロスの叙事詩「オデュッセイア」(トロイ戦争後半以降の物語)では、英雄や名士のみが死後に行くことの許される、永遠の理想郷として描かれる。フランス大統領官邸エリゼ宮 Élyséeの名もこれにちなむ。

2A 最初のソロだけ。

Wem der große Wurf gelungen, 大きな幸運が当たった人は、(幸運に当てられた人)  
～に [開代3格] 大きな 幸運が [ms1] 当たった [充分、現在完了、ist省略] ※gelingen (成功する・当たる)、Wurf(投げること)

Eines Freundes Freund zu sein, (すなわち) ひとりの友の友となるという (幸運が)、  
一人の友の 友に [zu不定詞] ～になる

Wer ein holdes Weib errungen, 優しい妻を得た人は  
～は 一人の 優しい 妻を [ns4] 獲得した [充分、現在完了、hat省略] ※erringen (獲得する)、Weib は中性名詞  
[開代1格]

Mische seinen Jubel ein! その歓声を一つにしよう!  
混ぜ合わせよう その 歓声を 一つに ※分離動詞 ein\_mischen

2B 最初の合唱だけ

Ja, wer auch nur eine Seele そうだ! たとえ、ただ一つの魂だけであったとしても  
そう [開代1格] は ～でも ただ～だけ 一つの 魂 [fs4]

Sein nennt auf dem Erdenrund! この地上において“自分の物”と呼ぶ(呼べる)人は!  
自分の物 ～と呼ぶ ～の上に この 大地 ※SVOC=主語 wer、動詞 nennen、目的語 Seele、補語 Sein

Und wer's nie gekonnt, der stehle そして、それをできない者、その者は  
そして [開代1格] は ～できない [指代] その者は そっと出て行け※ ※wer's = wer es、der は werを受けている

Weinend sich aus diesem Bund! 泣きながら、この仲間からそっと出て行け!  
[現在分詞] 泣きながら ～から この 仲間 ※sich stehlen そっと出て行く  
(stehlenの3単現は stiehlt、stehle は3単・接続法、要求話法)

3A 最初のソロだけ

Freude trinken alle Wesen 喜びを飲む、全ての生きとし生けるものは  
喜びを 飲む 全ての 生き物は[中性複数] ※Wesen(本質)→形容詞を伴い「～である存在」、被造物

An den Brüsten der Natur; 自然の乳房から。  
～から 乳房 自然の [女性2格]

Alle Guten, alle Bösen 全ての善きもの、全ての悪きものは  
全ての 善い者は 全ての 悪い者は

Folgen ihrer Rosenspur. その(自然の)バラの道に従ってゆく  
従う その※ パラの道

※この ihrer は単数の女性名詞、もしくは3人称複数名詞をうけている。この節に登場する単数女性名詞は Freude・Natur、複数名詞は Brüsten がある。ただし、次節最初の文の sie も同じものを受けているので、複数名詞ではない。すると Freude・Natur のどちらかとなる。後述のように、私は Natur を受けていると考える。しかし ihrer・sie とも Freude を指すと解釈した訳もある。  
〔「創造主」と訳したのを見かけたが、いくら何でも勝手な意識だろう。創造主 Schöpfer は男性名詞である。その訳者は「自然」と同義として考えているのだろうか...〕

3B 最初の合唱だけ。

Küsse gab sie uns und Reben, それ(自然※)は私たちにキスと葡萄酒と  
キス(複数)を 与えた ※それは 我々に 葡萄の木(複数)を ※ Rebe(葡萄の木)→複数形で「葡萄酒」と一般的には解釈

einen Freund, geprüft im Tod; 死の中で試された一人の友を与えた。  
一人の 友を 試練を受けた ~の中の 死 ※ prüfen(試す)

Wollust ward dem Wurm gegeben, 快樂は虫けらに与えられた。  
※快樂は [受動] 虫けらに 与えられた

und der Cherub steht vor Gott! そしてケルブが立っているのだ、神の前には！  
そして ※ケルブは 立つ ~の前に 神

※ gab が geben の過去形 3 人称単数だから、sie は 3 人称単数女性である。これは前節末尾の ihrer と同じものを指す。Natur か Freude だ。  
私は Natur を採用し、「全ての生き物は Natur の乳房から Freude を飲む」そして「Natur が人間にキスなどを与えた」という文脈で理解した。

※ Wollust(肉欲・性欲の快樂)……「自然は、高等動物たる人間にはキスと葡萄酒と友を与え、虫けらにも肉欲を与えた」と“自然の恵み”を  
アガペー的平等として解釈するか。それとも「人間に相応しくない肉欲は虫けらに与えられた」と、人間と虫けらに格差があるという解釈を  
すべきか。一般的には後者の解釈だろう。私もそれに同意するが、単純に「肉欲は下等だから、下等な虫けらに」というのではない、と思う。  
次項で見ると、ケルビムが立ちだかっているため、人は「エデンの園」に再び入ることはできない。そこは、『創世記』を素直に解釈  
するならば、本来は肉欲が罪・恥とされない世界だった。それを覆したのがアダムとイヴの罪だ。肉欲は「下等生物の虫けらに相応しい」の  
ではなく、「(虫けらでさえ与えてもらえるのに)、アダムとイヴの罪のために人間には与えてもらえないものだ」、と私は解釈する。

※ Cherub は一般には複数形のケルビムで知られる。旧約聖書『創世記』第 3 章によると、神はアダムとイヴを追放した後、命の木への道を守ら  
せるため、エデンの園の東に回る炎の剣とともにケルビムを置いたという。『エゼキエル書』第 10 章では「4 つの顔と 4 つの翼を持ち翼の下  
に人の手のようなものがある」という姿として描かれている。このように、「天上の国の入口をケルビムが守っている」という設定を踏まえ  
ると、der Cherub steht vor Gott は、「ケルブが神の前にいるため簡単には近づけない」と解釈すべきだろう。最後の vor Gott でベートーベン  
の音楽が示す足元が崩れていくような雰囲気は、こうした視点に立って初めて納得がいく。人は、肉欲も与えられず、神にも近づけないのだ。

4C 上 2 行はテノール・ソロ。下 2 行はテノールに男声合唱が唱和する。

Froh, wie seine Sonnen fliegen, 朗らかに、創造主がちりばめた恒星たちが飛び回るように  
朗らかに ~のように 彼の 恒星たちが 飛びまわる ※ froh(元気よく・朗らかに)、※ Sonne(太陽・恒星)の複数形

Durch des Himmels prächt'gen Plan, 壮大な天空の間を  
~の間を 天の(2格) 豪華華麗な 設計図 ※ Plan(計画)→神が作った全宇宙の構想、※ prächtig(華麗な)

Laufet, Brüder, eure Bahn, 進め、兄弟たちよ、お前たちの道を  
進め(2複命令) 兄弟たちよ お前たちの 道を

Freudig, wie ein Held zum Siegen. 喜びに満ちて、勝利に向かう英雄のように  
喜ばしく ~のように 英雄 ~に向かう 勝利

1C 2行ずつ、初め男声ユニゾンついで4声で。次は上2行を二重フーガ第1主題として。最後は4行を急速合唱。

Seid umschlungen, Millionen!

[2複命令] (汝ら) 抱きしめられよ [完分] 何百万の人々よ

抱きしめられなさい、何百万の人々よ！

※ umschlingen (抱きつく) → 複数に対する受動の命令文

Diesen Kuss der ganzen Welt!

このキスを [男単4格] 全ての 世界へ [女単3格]

このキスを全世界へ！

Brüder! überm Sternenzelt

兄弟たちよ ~の向こうに 星の天幕

兄弟たちよ、星空の彼方に

※ Zelt (幕屋、テント)

Muss ein lieber Vater wohnen.

~に違いない 愛すべき 父が 住んでいる

愛すべき父が住んでいるに違いない

※ Seid umschlungen のフレーズは原詩でも Chor と記され、当曲でも必ず合唱で歌われる。よって「汝ら、抱きしめられよ」の唱和は、事実上「我らは互いに抱き合おう」という意味になる。この詩はフランス革命直前の1785年の作であり、「我々が抱き合う」という表現を使うと、ボーマルシェの戯曲「フィガロの結婚」のように、検閲に引っかかる恐れがあったかもしれない。Sternenzelt については、シラーもベートーベンも、ドイツ観念論哲学者カントの影響を受けている。1820年2月のベートーヴェンの会話帳には、カントの『実践理性批判』から言葉を引いて、「Das moralische Gesetz in uns, der Sternenhimmel über uns--Kant!!! (我らが内なる道徳律と我らが上の星空 -- カント!!!)」と記されている。この言葉はカント自身の墓碑銘である。

3C 静かに荘厳に歌われる最も感動的な場面。

Ihr stürzt nieder, Millionen?

お前たちは ひざまづくか 何百万の人々よ

お前たちはひざまづくか、何百万の人々よ？

※ 分離動詞 nieder\_stürzen (崩折れる)

Ahnest du den Schöpfer, Welt?

感じるか お前は 創造主を 世界よ

お前は、創造主を感じるか、世界よ？

Such ihn überm Sternenzelt!

[2単命令] 探せ 彼を ~の向こうに 星の天幕

星空の向こうに彼を探せ！

Über Sternen muss er wohnen.

~の向こうに 星々 [複] ~に違いない 彼は 住んでいる

星々の向こうに彼は住んでいるに違いない

※ 1行目は Millionen に対して ihr (お前たち) と複数形で呼びかけている。だが2行目は du (お前) と単数だ。この du は「世界」に対して呼びかけている、という解釈も成り立つ。「世界よ、お前を造った創造主を感知しているか？」という解釈はあり得るだろう。だが、3行目の「探せ」の命令文も、単数の du に対するものだから (ihr に対する命令ならば sucht)、これも「世界」への命令か？ 私は「世界よ、創造主を探せ」という命令文は不自然だ、と考える。やはり3行目は、「世界」の中の単数の「お前」(すなわち everybody) に対する「探し求めよ」という命令であろう。とすると、2行目も「世界の中の everyone」に対する呼びかけ、と素直に解釈すべきか。※ 1824年初演のこの曲で、ベートーヴェンがこの歌詞を採用したのは、まさに保守反動ウィーン体制への批判・反発だった。トスカニーニがフルトヴェングラーに対して、「独裁者ヒトラーの国で「第九」や「フィデリオ」を演奏するのはおかしい」と批判したが、むしろベートーヴェンのこれらの作品は「王政への抵抗」をハッキリと示している。おめでたい時に「第九」を演奏することが多いが、実はそれは“この曲をよく分かっていない使用方法”なのかもしれない。

参考：

- ・ The Web KANZAKI ~ベートーベン第九の歌詞と音楽 <https://www.kanzaki.com/music/lvb-sym9f.html>
- ・ 日々の泡 L'Écume des jours ~ベートーヴェン交響曲第9番の歌詞：シラー「喜びによせて」：その2 (注釈) <https://blogs.yahoo.co.jp/anamnesis1964/22703679.html>